



えん
社会福祉法人
同胞援護婦人連盟



こどものうち 八栄寮
小6・中2女児作

令和7年12月発行
第41号



社会福祉法人
同胞援護婦人連盟

ヒヨドリの教え

理事長 村松 満

我が家の中には一本のマキの木があります。今年の5月初め、その最上部にヒヨドリのつがいが巣作りを始めたらしく、毎日忙しくビニールの切れ端や細い小枝をくちばしにくわえて行き来しているのを窓ガラス越しに見ることができました。これが6月末になると、果たしてひなと思われるピーピーと鳴く声もそのあたりから聞こえてきて、さらに、暑さ厳しい7月の初めになると、ついに一羽のひながマキの木の巣から隣の梅の木の枝に飛び移り、いわゆる巣立ちの瞬間を偶然にも目撃することができました。

ひなはまだ尾羽も小さくおぼつかない飛び方でしたが、何とか地上に落下することなく葉陰の枝にしがみつき次の行動を思案しているようにじっとしていました。何やら見ているこちらにも緊張感が伝わって来るような時間でした。この間、親鳥はといえば、近くの物干し竿や他の木の枝の間をせわしく飛び回り、我が子の行動を片時も目を離さずに見守りつつ、一方で我が子の巣立ちをしきりに促しているように見え、あたりには天敵のカラスも数多く飛来し、ともするとひながその標的にさらされる危険性もあり、親鳥としてはさぞ気が気ではなかったのではないかと氣を揉むほどでした。

すると次の瞬間、ひなが隣家の窓枠に取り付けてある格子状の柵にいきなり飛び移り、そこがたまたま金属製でできたものであったためか、うまく止まることができず、羽をバタバタさせて地上に落下するかと思うほどの危なげな事態を見て取れました。「これはまずい」と思うが先か、それを見た親鳥は、素早く近くの木の枝にひなを誘導するように甲高い鳴き声を発しながら、自らその木の枝に飛び移り、大丈夫だからこちらにいらっしゃいとばかりにひなを励まし、その場を離れるよう警鐘を鳴らしたのでした（少なくともこちらにはそう見えました）。ひなはその意味を察知し、すぐさま親鳥のいる小枝に飛び移り、親子ともども同じ小枝に無事止まることができたのを確認したときは、その一部始終を眺めていた者として安堵この上ない心持がしたものでした。その後、ヒヨドリ親子の姿は深い木の葉の陰に隠れ、どこへ飛んで行ったのか見えなくなり、これまで毎日騒がしいほど聞こえていたヒヨドリの鳴き声も、周囲からは聞こえなくなりました。我が家でのひなの巣立ちが終わったことを実感し、同時に、親鳥がひなの巣立ちに果たす役割はかくも愛情深く、凛としたものであるのか改めて教えられたような、夏の暑い日の経験として心の隅に残っています。

我が施設から毎年巣立っていく子どもたちの姿に重ね合わせ、この親鳥の見守りの姿勢に学ぶべき何かを感じ取ったのは言うまでもありません。



あつさ

こどものうち八栄寮 施設長 大村 正樹

今年の夏はとても暑かった。原稿を書いている9月の下旬になっても最高気温が30度を超える日が何日もある。気象庁によるとこの暑さは地球が温暖化する前は数万年に1回程度だったそうだが、温暖化した今では40年から50年に一度の暑さだという。

この「暑」さにもかかわらず、八栄寮の子ども達は夏休みの宿題に、部活に、アルバイトに、そしてキャンプや川遊びにと生活を満喫し、子ども達全員元気に2学期を迎えた。

そして秋、いよいよそれぞれの子どもたちの目標の実現に向かって力を「熱」く注ぐときだ。就職試験に臨む子ども、高校進学や大学進学の準備を進める子ども、おうちに帰る取り組みを始める子ども、また、安定した学校生活を送るために、部活や授業など毎日の生活を充実させる子どもなど様々だ。

職員は子ども達一人ひとりの目標が実現できるように、ある時は厳しく、ある時は寄り添いながら、子ども達とかかわっている。子ども達との激しいぶつかりあいになることもある。そんなとき、職員集団の「厚」みが大切になる。対応している職員が孤立せず、職員同士が力を出し合い、励ましあい、何とか、目標の実現を達成してもらいたいと私は願っている。

この職員集団の「篤」みがより「篤」くなることが子ども達も職員も幸せにつながる。私は職員集団の質が「厚」くなるよう、施設長として全力を尽くしたい。そのためにも読者の皆様のお力添えをぜひお願いしたい。よろしくお願いいたします。





暑かった夏休みの思い出



こどものうち八栄寮 保育士 馬場 仁美

今年は気温が高く熱中症アラートが毎日のように出ていました。

八栄寮の子どもたちもお部屋で過ごす時間が多く、

職員は子どもが夏を感じられる工夫を考える機会が多く

あったと思います。私が働く太陽の家では、広い中庭で

9人の幼児が入る大きさのプールで泳いだり、近場の川で

遊んだり水遊びを楽しみました。はじめは水に抵抗の

ある子どもも、慣れてくると勢いよく遊べるようになりました。また、お昼ご飯を夏祭りの屋台をテーマに太陽の家で調理したものを食べたり、子どもたちでパンケーキをつくったりと調理にも挑戦しました。自分で作ったものは「おかわり！」といっぱい食べて満足げな表情。例年よりもお部屋で過ごす時間が多かったですが、その中でもできることを探して、子どもの挑戦を応援したり、成長を見ることができました。子どもたちが長くお家にいたからこそできた思い出と一緒に楽しめたことが嬉しかったです。二学期も夏休みの思い出を糧に頑張りたいと思います。



いつか訪れる「日常」へ



こどものうち八栄寮 児童指導員 水野 佳保

今年の夏休みも、行事を通してたくさんの思い出ができました。私が特に子どもの成長を感じることができたのは、宇宙の家のメンバーで行ったキャンプです。小学生と高校生の子ども達5人だけで、公共交通機関を利用してキャンプ場まで来ることをミッションとして組み込みました。普段は年少児にイライラして当たってしまうこともある高校生のKちゃんがリーダーとなってくれました。小学生のYくんの身長が足りずに券売機のボタンが押せない時に優しく声をかけて代わりに押してあげたり、間違ったバスに乗ってしまった時に運転手に事情を説明して解決してくれたりと、Kちゃんの持っている優しさ、責任感などの素敵な部分を見ることができました。何より、キャンプ場に着いた時のKちゃんの達成感のある表情を見られたことが嬉しかったです。また、初めてのテント泊でドキドキだったMちゃんとYちゃんが「思っていたより快適だね。楽しい！」と楽しそうにはしゃぐ姿も見ることができました。

近年、夏行事を行うには熱中症対策などの様々な配慮が必要となってきていますが、これからも子どもの成長に繋がり、思い出に残るような夏らしい体験を大切にした行事を行っていけたらと思います。





温度が感じられるやりとり

子どものうち八栄寮 ソーシャルワーカー 佐藤 直樹

八栄寮にソーシャルワーカーとして入職して3年目になります。多くの子どもやその家族と関わっています。日々のやりとりの中で、可能な限り温かい声掛けをしたいというのがベースにはあります。ただ良いことだけでなく、相手からすれば嫌なこと、不都合なことも伝えなくてはならない場面もやってきます。時に相手からすれば冷たい声掛けに聞こえてしまうこともあるかもしれません、目の前のその子に、その家族にこうなって欲しいという思いのようなもの、こちらの熱さが伝わって欲しい。そんな風に思っています。

担当のある親子が、母の体調不良で対面の交流が電話交流に替わったことがありました。最初に親子で話してもらい、その後私がお母さんと話したのですが、体調不良の自分を思いやる言葉をかけてくれたことに成長を感じたと涙ながらに話していました。親子の間でそういったやりとりが生まれたことに思わず温かい気持ちになりました。人が担っている仕事だからこそ、無機質で機械的なやりとりにならずに、そういった互いの温度が感じられるやりとりができるように子どもやその家族と関わっていきたいと思います。



法人の歴史はドラマのよう-創立80周年に向けて-

学習塾オリーブみらい 塾長 内山 大樹

来年、社会福祉法人同胞援護婦人連盟は創立80周年を迎えます。その始まりは終戦直後、伊藤房緒という一人の女性による、戦争によって損なわれた人々に対する熱意と行動力でした。上野駅前の引揚者ホーム、子どものうち上野寮、千葉県富里村の七栄寮、八王子市の八栄寮へと時代が必要とする福祉を切り拓いてきました。私は、1997年に発行された50周年記念誌から、設立の経緯や寮の生活、退寮生たちの当時を懐かしむ言葉に感銘を受け、法人の歴史調査を行なっています。倉庫に眠っていたコンテナには、設立当初の記録や房緒の思いが込められた書簡、子ども達が書いた日記など、当時を知る手がかりが詰まっていました。知恵を絞った資金繰り、子どもの親を見つけ出す執念、辛い経験とは裏腹にコメディのような子ども達の日常。まるで朝ドラのようです。知れば知る程、この物語を一人でも多くの方に届けたいと思いました。80周年は単なる通過点ではありません。創設者・伊藤房緒の「あたゝかく、明るく、かゞやきにみちた世界をつくる」という志を未来へ託す重要な節目です。私もこの熱い思いを胸に、未来へ残る形でこの歴史を継承する一端を担えれば幸いです。



事業の厚さを目指して～リフレここえ多様化の歩み～

リフレここえ 施設長 横井 義広

リフレここえは、平成17（2005）年に設立しました。その後、ここ十数年で高機能化・多機能化を目指してきました。高機能化した事業としては、平成27年度から施設内でアフターケアの機能として行っている「無料塾オリーブ八王子」の運営。また、多機能化としては、開設時から行っている、①「子育て短期支援事業（トワイライト・ステイ事業）」、②現在18市と契約している「緊急一時保護事業」、③令和6年度から契約した「東京都女性相談支援センターの緊急一時保護事業」、そして令和6年度にプロポーザルがあって交付決定を受けた「東京都妊産婦等生活援助事業」です。妊産婦の事業は、今年度もプロポーザルがあって継続して交付決定になりました。

多機能化するメリットは何でしょうか？妊産婦等生活援助事業をみると、母子生活支援施設との親和性が高いということです。母親の自立支援のノウハウをそのまま援用でき、調停等法的支援や外国籍の家族の支援ができること、乳幼児の預かりや保育が可能であり、妊婦に同伴児童がいたらケアも可能です。また、医療分野の専門職の配置が可能になります（助産師、看護師、保健師等）。さらに経営的な視点では、妊産婦等の事業を通じて本体の入所につながったケースもありました。補助金を得ることで、暫定定員による収入の減少の補填が可能になることです。

多機能化する社会的な意味は何でしょうか？「より早くニーズを持った家庭と知り合うことができる」ことや、児童相談所等が関わった家族への地域での生活を支える機関としての役割が可能となる（児相一時保護ケース、親子関係再構築支援ケース、特定妊婦等）ことが考えられます。さらに、民間で長期間にわたり、課題（ニーズ）が生じた時に、その都度ニーズの程度によっての支援が可能になるということではないでしょうか。

しかし多機能化することは、良いことづくめではありません。ひとつの事業所に複数の目的や支援の中身があり、その対応も事業ごとに違うため、多くのことを考え運営しなければなりません。

このような大変さを内包しながらも多機能化することで、母子生活支援施設がDVの施設であるということから脱却し、「すべての子育て世帯」の支援の拠点になることを目指しています。これからも応援よろしくお願ひします。

【各施設 在籍者数】（令和7年11月末現在）

こどものうちハ栄寮 幼稚 10名 小学生 14名 中学生 11名 高校生 14名 【計 49名】	リフレここえ 乳幼児 21名 小学生 13名 中学生 3名 高校生 1名 【計 19世帯 57名】	八王子市子ども家庭サービス事業利用者数 令和7年6月～令和7年11月末 ショートステイ 474名 トワイライトステイ 154名 合計 628名
---	--	---



暮らしの厚みを増やしたいです



リフレこのえ 母子支援員 野島 未央花

私は平成 30 年に当法人に入職したため今年で 8 年目になります。その間に結婚、出産などのライフステージの変化もあり、現在は育児短時間勤務という形で働いています。

リフレこのえは生活支援施設の名の通り、利用者の方たちの暮らしに寄り添った支援が多くあるため、自身の生活の経験やノウハウがそのまま支援に活きる場面も多くあると感じています。リフレを利用するお母さんの中には、子育てや家事はこうでなければ、と思うことで苦しんでいる方も多いいらっしゃいます。そんな時にこんな方法もあるよ、と自分の経験をお伝えできる引き出しが増えていることを感じると、嬉しく思います。自身の人生経験の厚みが支援に良い影響をもたらし、それを受け取った利用者の方がリフレでの経験をご自身の人生の厚みに加えていくような、良い循環を生みだせる職員になりたいと思っております。



暑さに負けずに

リフレこのえ 少年指導員 岩本 萌々華

新任として初めて参加した泊りがけのキャンプは、真夏の強い日差しとの戦いでもありました。予定していた 9 人のうち体調を崩して欠席する子もあり、最終的には子ども 5 人での実施となりました。キャンプ中は熱中症を防ぐため、こまめな水分補給や日陰での休憩を呼びかけるように心がけました。カレー作りでは、人数が減ったことで班に分かれず全員で協力する形となり、5・6 年生が下級生をリードして火の管理など率先して引き受けってくれました。暑さで大変な中でも一人一人が役割を果たし、最後までやり遂げる姿に大きな成長を感じました。皆で作ったカレーは別格で、達成感と笑顔にあふれた時間となりました。今回の経験を通して、子ども達を見守る責任の重さと同時に、その成長に立ち会える喜びを強く感じました。これからも、先輩方に学びながら、自分自身も成長し、子ども達が安心して挑戦できる場を丁寧に作りたいと思います。





パワフル



リフレこのえ 少年指導員 大田 航也

今年の夏も記録的な酷暑となり、子どもにとっても体力との戦いの日々でした。熱中症警戒アラートも連日発令され、外遊びに行けない日も多くありました。

そのような中、地域の図書館へ行った日は、お気に入りの1冊を見つけ真剣に読みふける姿、学童室で映画鑑賞をした日にはポップコーン片手に真剣にスクリーンに見入る姿。キャンプ翌日、思い出づくりの工作をした日には、キャンプ場で拾った木の実や小石を思い思いに色紙に貼りつけ、色とりどりに、大胆に筆を走らせる姿。新たな子どもの姿も発見できた夏でした。



また、暑さが少し和らいだ日には、職員お手製のひんやりタオルを首に巻き、短時間ですが公園へ行った日も。思いっきり体を動かし遊ぶ子どもの姿から、子ども達の底なしのパワーを分けてもらったように感じます。

今後も、子どもたちとともに、活動の層が厚い、「楽しい！」をたくさん見つけられるパワフルな学童を目指していきたいです。



★てんとうむしカフェ開催★

子育て応援ひろば 内藤 珠美

地域で子育てしているママ（パパ）達にホッと一息ついてもらえるようなひろばにしたいという子育て中職員の想いからはじまった子育て応援ひろば『てんとうむし』が2025年5月で6周年を迎えました。「5月で6周年ですよ！」と開設当初からひろばに来てくれているママに教えてもらい、6周年イベントを計画。

予想以上に参加希望者が多く、2部制にして開催しました。幼稚園に通っている子も開設当時は赤ちゃんで、ひろばでハイハイして、立って、歩いてと成長を見守ってきました。八王子市から引っ越した方も遠くから来てくれたりしてにぎやかで、あたたかい時間でした。毎週水曜日の午前中という限られた時間でのひろばですが、地域の方に愛されて6周年を迎えることができたことを実感し嬉しさで胸が熱くなりました。ありがとうございました。



てんとうむしカフェ



～ご寄付のお願い～

- 1 郵便振替 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 00110-1-499359
- 2 ゆうちょ銀行 : 社会福祉法人同胞援護婦人連盟 019店 当座 0499359
 - ・折り返し当法人からの領収書をお送りします。
 - ・社会福祉法人に対するご寄附は確定申告で所得控除の対象になります。
 - ・住民税控除についてはお住まいの区市町村へお問い合わせください。



社会福祉法人

同胞援護婦人連盟

児童養護施設 こどものうち八栄寮
母子生活支援施設 リフレこのえ
八王子市 子ども家庭サービス事業

〒193-0944 東京都八王子市館町 2232-1
Tel:042-661-5891 Fax:042-667-0006
<http://www.doenfujin.jp>

編集後記

今回のテーマは「あつさ」です。
今年の夏は異常気象で暑かったと思います。
私たち職員は日々子どもへ「手あつい」支援を心がけています。

職員それぞれの「あつさ」を、この「○えん」を通して日々の様子を感じていただければ幸いです。

【広報誌担当 花島まどか・垣内桃子】

ご意見・ご感想・ご質問を法人宛のお手紙またはFAXでぜひお寄せ下さい。お待ちしております。